

# ラフカディオ・ハーンとトワイライト

松村有美

大正大学大学院研究論集 第三十五号

## 0. はじめに

ラフカディオ・ハーンの奇妙な実体験にもとづいたエッセイ "Vespertina Cognitio" には超自然の恐怖が薄明の世界で起こると書かれている。さらにハーンは、この薄明の世界が幼い頃耳にした絶対に話してはならぬケルト民族のある恐ろしい物語の印象によるものだと述べている。小論では、ハーンの薄明の世界がアイルランドのものと共通であるということを、彼の W.B. イェイツに関する講義録や、イェイツの "Into the Twilight" という詩を通して見てゆきたい。またイェイツの薄明の世界と同一の点、異なる点をも観察してゆく。

ここで“アイルランド的”の意味するものを規定することが求められるかもしれないが、今の段階で一義的に決定することは困難である。ここでは文化史上のことを念頭に置いているので、政治的なアイルランド国という区画は別物となる。美術史上の渦巻き文様とか、神話上に妖精が多く登場するといった一般的なイメージの総体である。従って、本稿で扱うような個人的事例を積み重ねてゆき、諸部門に共通に妥当するようなイメージを形成してゆくの順序であると考えている<sup>1)</sup>。

## 1. Twilight

Onions の語源辞典の twilight の項には次のようなことが書いてある。'twilight: (period of) half light.' (952a)<sup>2)</sup> つまりまだ半分ほどしか光っていない段階の光、またはその期間のことである。また、寺澤芳雄の語源辞典<sup>3)</sup> によると原義は 'the light between' とあり、中間段階の光ということである。OED を見ると、初出用例は 1440 年頃の *Promptorium parvulorum sive clericorum, lexicon Anglo-Latinum princeps* であり、そこに記される語義は「昼と夜の間、また夜と昼の間の薄明かり」(Twylghte, be-twyx þe day and þe nyghte, or nyghte and þe day) である。以上がトワイ

ライトの字義的な意味で、ほぼいずれも明暗の世界のいずれにも属さず、中間的で曖昧な段階と定義している。これらに基づき本論では twilight を 'half light' であると了解して使用することとする。また、イェイツ詩辞典も参照してみると twilight とは「薄明。夜明け前（ときには夕刻）の、昼と夜、光と闇との間に横たわるうす明かり 'half-light' の時間。魔女や妖精 faery が活動し、ドルイド Druid が行う魔術的な灰色の時間、原始のアイルランドの文化が始動しはじめたばかりのころを偲ばせ……」<sup>4)</sup> と言われている。

さて、'twilight' というと、思い出される言葉がある。それは、W.B. Yeats の作品である *Celtic Twilight* (1893) である。「ケルティック・トワイライト」という句はイェイツの作品から世に広まったものだと考えられるが、それについて、R.A. Scott-James は次のように指摘している。

It was the beginning of the 'Celtic revival' and for Englishmen of new awareness of 'the Celtic Twilight', an expression derived from the title of Yeats's book published in 1893. For some time these words were used, often by people who had not read the book, to indicate something vague, misty, unsubstantial, like the romantical outpourings of the Highland Scottish poet, Fiona Macleod, who on his death was discovered to have been William Sharp<sup>5)</sup>.

Scott-James によると、イェイツの『ケルトの薄明』を読んでいない人にまでイェイツの文を通じて、(それを読む読まないに関わらず) この「ケルティック・トワイライト」という言葉が使われると言われている。イェイツに注目していたハーンであれば、当然この「ケルティック・トワイライト」という言葉を目にしていた可能性は高い。この言葉は夜と昼の境というだけでなく、曖昧で明瞭に認識できず、もやがかかったようなものをも意味するようになり、それがケルト的であるというような意識が形成されていったようである。イェイツの読者であると否とにかかわらず使われたと

いう「ケルティック・トワイライト」は、この時点で時代の流れにも乗り、人々に受け入れられたのであろう。と同時に、イエイツの文を読まずにそうした観念を持つということは、それが相当に一般化されたものとなったことを意味している。

## 2. Vespertina Cognitio (邦題「薄明の認識」)

ハーンのエッセイ「薄明の認識」の本文の内容に踏み込む前に、先ずこのタイトルについて述べたいと思う。タイトルには *Vespertina Cognitio* というラテン語が用いられている。これはトマス・アクィナスの『神学大全』第一部第五十八問の諸項目のうち、朝 (*matutina*) と夕 (*vespertina*) の認識 (*cognitio*) について述べられている箇所に出てくる言葉である<sup>6)</sup>。ハーンのこの作品は、彼が 1887 年 10 月～1889 年 5 月にかけて西インド諸島のマルティニク島に滞在した時の個人的な体験の一つを記述したものである。以下にこのエッセイにおける twilight すなわち 'half-light' について見てゆくことにする。

「薄明の認識」の冒頭部分でハーンは超自然の恐怖がいかに恐いか、ということを描いている。子供は昼夜問わずこの恐怖を知っているが、大人はうとうとしているときか、心の状態がおかしくなる病気の時以外はこの恐怖を知らないとしている。けれども、目の覚めているときにこの恐怖を経験してしまったら、その苦しみは死に到るほど強烈だといっている。この恐怖は個人の経験だけにとどまるものではなく、先祖以来の恐怖であると述べている<sup>7)</sup>。

ハーンには「超自然的な」「不可思議な」「人間離れた」ものへの憧れや興味が若い頃から見られた。そのことについては拙論「ハーンと手」『へるん』41 (2004), 38-41 の中で、執筆活動を始めたばかりの頃の『ザ・ギグランプス』から晩年の作品集である『怪談』に到る迄、ハーンの諸作品に一貫して見られるのが「現実離れた」「超自然の」「不可思議の」世界であると述べたことがある。

ハーンは「薄明の認識」の中で超自然の恐怖を経験したと書いている。西インドでの「滅入る感じ」<sup>8)</sup> の昼寝中、彼はびくっとして目を覚ます。物音に驚くというのではなく、何かショックのようなものに目を覚ますのである。

'A slow suffocating sensation would struggle up into the twilight-region between half-consciousness and real sleep, and there bestir

the ghastliest imaginings--fancies and fears of living burial.' (下線は筆者)<sup>9)</sup>

ここで注目すべきは 'twilight-region' である。トワイライトが字義的には夜と昼の中間段階という時間的な位置関係にあることを前に確認したが、ここでは睡眠中と半意識状態との中間段階という人間の精神状態の中間段階的なものへと推し進められて使用されている。これにはイエイツの曖昧として明瞭に認識されにくいもの、という考え方と通じるものがある。しかしこの時点で相互に影響があったといえるかどうかは論じ切れなしい、両者の間には客体と主体の問題という差異がある。

さて、薄明の世界とは、どんな世界だろうか。ここでは上記引用中の下線部 'twilight-region between half-consciousness and real sleep' (半意識と眠りの間の薄明の世界) と書かれている。それでは、そこで耳にする音というのはどんな音であろうか。それは 'phantom crescendo'<sup>10)</sup> 「まぼろしの漸強音」<sup>11)</sup> だという。ハーンは論述を進めるにあたり、phantom crescendo という術語を援用する。この漸強音というのは、しばしば金縛りが起きるときに耳にするという音である<sup>12)</sup>。金縛りというのは、身体が寝ていて、頭が起きている状態に起きるといわれている。つまり、起きているのと寝ているとの中間状態の時に起きるのである。まさに、ハーンがこの twilight-region と表現した薄明の世界は、そんな状態を意味するのではないだろうか。そして薄明の世界の恐怖というのは、'living burial'、生き埋めの恐怖、つまり生きながらに埋められるというこれも生と死の間なのである。中間段階は初め夜／昼の境であったものが、意識／無意識の間へと、更には生／死の境といった具合に広げられてきており、またそれだから、恐怖へと結びつく契機が生まれてくることになる。

さらに、ハーンが体験した個人的恐怖の話へと記事は進む。うだるような暑さの中、ハーンとガイドが昼寝をしていると背の高いゾンビがミシリミシリと足音を立てながら彼らの部屋へ入ってきたという、息も止まるような恐怖体験だ。一度は、ガイドと飛び起きたハーンだったが、時がたち、ひんやりとした風が吹いてきたとき、ハーンは気温の変化によって床板のミシリミシリという音が発生したとことを理解するのである。彼は眠りの不完全な状態、つまりそれは先に挙げた「薄明の認識」からの引用の状態でありその下線部「半意識と眠りとの薄明の世界」だったということがわかる。これは「私の守護天使」にも出てくる従姉妹

のっぺらぼうの認識にも通じるものがある。決して誤認ということではなく、こうした中間段階におきる、特殊な認識ということである。「むじな」も同様である。こうした点からハーンの怪談観を再考することも有益である。

この奇妙な夢体験についてハーンは体験者の持つバックグラウンドによって分析しようとする。ハーンと共に昼寝をしていたガイド、ルイズは西インド諸島（カリブ地域）の出身なので、それを次のように分析している。

That which my guide had seen in his nightmare was a familiar creation of West-Indian superstition<sup>13)</sup>

悪夢の中でみたものは、西インド諸島の迷信の誰も知っている創作だというのだ。一方ハーンが見たものは、というと

the shape that I had dreamed about used to vex my sleep in childhood--a phantom created for me by the impression of a certain horrible Celtic story which ought not to have been told to any child blessed, or cursed, with an imagination.<sup>14)</sup>

子供の頃から私の睡眠を悩ませてきたもので、その幽霊は幸せな子供にも、呪われた子供にも話してはならないケルトのある恐ろしいお話の印象から、想像して作り上げた幽霊なのだ、と自ら述べている。このハーンの夢分析については伊藤亮輔が次の様な見解を述べている。

「この作品で注目すべきことは、これが「破られた約束」<sup>15)</sup>のプロットの展開の点で著しく類似していることに加えて、ハーンがこの作品中で述べた体験を幼少の頃に聞いたケルト民話と関連づけていることである。このことは「破られた約束」にも含まれていると予想されるケルト的要素を解明する上で興味あることである。」<sup>16)</sup>

この引用に加えて、さらに伊藤はフィン（Finn）にまつわる伝説、銀の豎琴を弾く妖怪エイレン（Aillen）を退治してフィニア武士の頭領になったフィンの話を取り上げ、「遠方から豎琴をかきながら近づいてくる妖怪エイレンといい、妖怪が近づくと動くことも物も言えなくなり、深い眠りにおちいる人々と言い、ハーンの商品「薄明かりの認識」や「破られた約束」と構成に類似点や共通点が多いことは注目すべきことである」<sup>17)</sup>と述べている。なお、ハーンのケルト的要素について初めて言及したのは伊藤である。このことはその重要度にも拘わらずほとんど知られていない

ので、Appendixとして伊藤の業績一覧を添えておく。

このフィンの物語とはアルイェンの豎琴の調べに眠らないように、フィンの父親がアルイェンの妖精の塚からとってきた毒槍のビルガの熱と毒の異臭をかぎ、豎琴の調べをやり過ぎした後、アルイェンが吐く恐ろしい青い炎をマントで消した。驚き、恐怖におののくアルイェンを追いかけ、槍で退治した勇敢なフィンの話なのである<sup>18)</sup>。

### 3. 週刊新聞『ザ・ギグランプス』 (*Ye Giglampz*) の「創刊の辞」

第2節で『ザ・ギグランプス』に言及したが、その「創刊の辞」を見てみよう。

We sat motionlessly meditative in the shadows of a Gothic doorway of medieval pattern, and ruefully observed the movements of a giant rat, slaking his thirst at a waterspout. Suddenly we were aware of a pressure--a gentle pressure on our shoulder. A hurried glance convinced us that the pressure was occasioned by the presence of a hand<sup>19)</sup>.

物思いにふけり、寝ているような、起きているかのような感覚に陥った筆者は肩を手で押されたような気がする。実際に触れられた感覚もあり、すばやく目を走らせると確かに肩の上にしなびた老人の手が置かれていた、という幻想的な記事である。この部分について拙論では「怪談話や怖い話でも一番恐ろしい事というのは、その話が「現実味がある」ということではないだろうか」<sup>20)</sup>と書いた。肩に手が置かれたという感触を書くことにより、読者の想像をさらにふくらませ、恐怖をあおる。ぼんやりとした夢の中にいるような感覚に陥っているとき、感触という感覚を使って読者をどきりとさせる。どうやら、ハーンは完全に起きているとき、もしくは完全に寝ている時よりもぼんやりとしたという 'half' 中間的な時にいきなり恐怖を与えるという傾向が強い。

2節と3節で述べたことから、超自然の恐怖、それは薄明の世界で起こり、薄明の世界はハーンが耳にしたケルトの絶対に話してはならぬ、ケルト民族のある恐ろしい物語の印象によるものであり、そして twilight-region がアイルランドのものと共通であるということが興味を引くのである。それがハーンの商品に ghostly や weirdness という特徴を与えていると考えられるのである。

## 4. イェイツと薄明

ラフカディオ・ハーンとトワイライト

ケルティック・トワイライトという一世を風靡した言葉を生み出したイェイツの方に視点を移してみよう。この節ではイェイツがハーンと共に twilight という中間の時間を特別なものと考えていたということを考察してみたい。イェイツの『ケルトの薄明』の訳は今日いくつかあるが、中でも柳川隆之介訳は興味深い。柳川隆之介は1914年4月1日発行の『新思潮』第一巻第三号に「ケルトの薄明」より（イェイツ）の表題で掲載した。この柳川隆之介というのは、実は芥川龍之介のことである。芥川の著述の大多数は雑誌掲載の後に単行本に収録されるのが通例であったが、この翻訳は彼の生前に再刊されることはなかった。若き日の芥川は山宮允らと共に愛蘭土文学会に参加している。山宮允はラフカディオ・ハーンの教え子であるから、ハーンが種を播いた日本のアイルランド文学研究の系統につらなるものと言える<sup>21)</sup>。

それでは、ハーンが行った講義を通してイェイツの薄明について見ていくことにしよう。東京帝国大学の講義でハーンはイェイツを世界の妖精文学を代表する作家であると認めていた。ハーンはイェイツの「空の妖精群」(The Host of the Air) を取り上げている。ハーンが学生に示したヴァージョンは *The Second Book of the Rhymers' Club* (1894) に最初に発表したものであり、初出のタイトルは "The Folk of the Air" となっていて、現行のものとは異なっている。ハーンが講義中に引用したものは12連からなるものであったが、次の連はイェイツがこれを個人詩集『葦間の風』(*The Wind among the Reeds*, 1899) に収めた時に削除されてしまったものである。

He knew now the host of the air,  
And his heart was blackened by dread;  
And he ran to the door of his house:--  
Old women were keening the dead.

これは妖精に自分の新婚の花嫁を奪われたと感じた男が急いで家に駆け戻ってみると、死者を弔う泣き女の老女達が集まって通夜をしていたという場面である。この連を削除したことに対して、ハーンは怒り、イェイツに抗議の手紙を書き送っている。イェイツはこれに対して謝罪し、元の形に戻すという手紙を送っているがそれは果たされなかった。こうした行き違いはあったものの、ハーンはこれによりイェイツを見限るということはなく、尊敬の念を抱き続けている。またイェイツも日本に強い憧れを抱いており、その日本

とハーンを常に結びつけて頭の片隅に置いていたに違いない。さて、ハーンはこの詩を

the best modern fairy poem by far that I know of. By "modern" in this case I mean produced in our own time; for the fairy poem of Yeats is also modern, in so far as it belongs to the century.<sup>22)</sup>

と前置きしてから紹介している。そして

'This is not consummate verse, but as a fairy poem it could not be surpassed. It has, in an extraordinary way, the power of communicating the pleasure of fear, which is a great art in poetry. And the words, the fancies, are all of the strange kind which should belong to so strange a story.'<sup>23)</sup> (下線は筆者)

特に 'the power of communicating the pleasure of fear' (恐怖の喜びを伝える力) が、この詩を偉大な芸術に仕立てていると説いている。ハーンはイェイツを新進気鋭の卓越した他に類を見ない詩人であると賞賛している。ハーンはまた、この詩が日本の昔話に似ていると思うかもしれないとい<sup>24)</sup>、更には妖精物語の持つ恐怖については次のように述べている。

……the fairy belief is much more terrible and gloomy; there is no humour in it; it is the subject of supreme fear.<sup>25)</sup>

terrible で gloomy であり、そこには人間味のあふれるおかしさのかけらもないとしている。替わりにそこにあるのは最高の恐怖だけであると。ハーンは「恐怖の喜びを伝える力」というのがこの詩を偉大な芸術に仕立てていると述べているが、恐怖と喜びの間にはぼんやりとした境界のようなものがあり、それこそが twilight-region と言えるのではないだろうか。そしてさらにイェイツのこの作品の持つ twilight-region は supreme fear であるとハーンは認識していると捉えても良いのではないだろうか。

イェイツの詩の "Into the Twilight" には、15行目に 'Love is less kind than the grey twilight' という一行がある。灰色のトワイライト世界ほどに愛はやさしくない<sup>26)</sup>と述べていて、現実世界の愛に対して失望している感がある。これがイェイツのトワイライト世界、妖精世界の supreme fear を引き立てているのではないだろうか。supreme fear は高揚した恐怖とも取れるが、恐怖の絶頂にあつて、逆に醒めきった、開き直った恐怖とも取れるようにも思われる。一方、ハーンには民話「子育て幽霊」を再話したものがあ<sup>27)</sup>るが、これは死後、墓の中で子供を産んだ母親が幽霊とな<sup>28)</sup>って

鮎を買いに来、子育てをするという話である。この末尾に 'love being stronger than death' という句が置かれている<sup>26)</sup>。一応は死んでいて埋葬されているのだが、新生児を養うために墓所から起き上がって鮎を買いに出てくる母親の執念が描かれている。この母親は完全に霊界へと行ってしまったのではなく、twilight-region にとどまって子育てをするのであるが、その母の愛が死よりも強い、と言われているのである。現実を起こる死よりも愛は強い、勝ると述べているハーンは少なくとも愛には失望していないことがわかる。これがイエイツとハーンの恐怖の質が違うという根幹になるのではないだろうか。つまり、イエイツのトワイライトという概念を通して見る世界というのは no humour であり、supreme fear であるけれども、ハーンの場合は、愛があり、愛があることにより、彼の作品を ghostly ではあるけれども weirdness というユニークさを含んだ奇妙かつ不可思議なもの、場合によっては暖かい感情すらをも醸し出すものになっているのである。

## 5. まとめ

以上、最初から述べたところをもういちどまとめて要約して、アイルランド的なものという仮の結論にする。

ハーンが単なる gruesome から ghostly へと至ったのは、ケルト的なものを触媒としながらも、日本を知ったために、その点はイエイツより有利だった。ただ両者の出発点は同じだったとしてもよさそうである。ハーンの薄明の世界は基本的にはアイルランドのものと共通であるが、ハーンとイエイツとでは薄明というフィルターを通した世界は若干異なる。ハーンはアイルランドの妖精物語に相当するような日本の昔話、伝説、幽霊物語などを再話するほど不可思議な世界が好きであった。イエイツもまた、妖精物語を農民などから聞いて書きおこすという類似の作業をしている。しかし両者の間には微妙な差異が認められる。すなわち、ハーンの薄明の世界の話には weirdness という滑稽さを含んだ恐怖があるのだが、イエイツの薄明の世界の話には、ハーンという言葉を借りれば、醒めきった、最高の恐怖だけがある。彼ら二人における薄明の認識は行き着くところはそれぞれ異なるところであったが、両者の薄明の世界は基本的なところではアイルランド的なものを共有しているということは認められるのである。

## 註

- 1) インド学の方面の研究者から聞いた話であるが、インドというと時間的にも空間的にもとてつもない広がりを持っているので、“インド的”と言うことは困難であるとのこと。その人は対象を限定して、イスラム侵入以前のインドに限り、しかも非サンスクリット文化をも除外するという。それは決して除外したものがインド的ではないということではなく、技術的に研究対象に含むことが困難であること、また視点が定まらなくなるからである。従ってその場合限定されたインドのことを“古典インド”と限定詞を付けて呼ぶ。これはフランスのインド学者等が編纂した *L'Inde classique* というマニュアルのタイトルに由来しているとのこと。本稿で採り上げた作家の薄命／トワイライトの認識が、アングロ・サクソンのものと異なっているとすれば、それをアイルランド的であると考えてみるという作業仮説に基づいている。また、ここで扱う時代などをあらかじめ限定するとすれば、ハーンとイエイツが生きている時代、そして地域ならびにそこにある特徴をアイルランド的と述べることにしたい。まず、時代についてだが、ラフカディオ・ハーン (1850-1904) とウィリアム・バトラー・イエイツ (1865-1939) の生没年をみてもわかるように、ほぼ同時代の作家である。イエイツは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起こったアイルランド文芸復興とともに生きている作家で、26 歳 (1891) の時に London Irish Literary Society を設立した。地域は、アイルランド文芸復興の起こったダブリン、そしてロンドンである。イエイツはアイルランドとロンドンを行き来する中で、オスカー・ワイルド (1854 ~ 1900)、ウィリアム・モリス (1834 ~ 1896) などと交流していた。ロンドンでも特にベッドフォード・パークに 1887 年に移り住んだイエイツ一家であるが、そこは、後にアイルランド文芸復興に助力した詩人・劇作家のジョン・トドハンター (1839 - 1916) らが住んでいたこともあり、「ベッドフォード・パーク・クラブ内の小劇場はこの「村」の文学的な生活の重要な場所」(松村賢一「薄明と喧騒と～アイルランド文芸復興の揺籃期をめぐって」『ケルト復興』(=中央大学人文科学研究所研究叢書 25) (東京：中央大学出版部, 2001) 319) と言われている。ハーンはこの頃日本に住んでいたが、海外のもの

は取り寄せて折りに触れて読んでいたので、日本にいても、そのギャップは少なからず埋められたであろうと考える。それから、そこにある特徴としては「世紀の転換期にダブリンで起こった文学運動は、アイルランド人の心がたえず過去の行為や情熱に影響を受けてきたという認識のもとに、深い過去へと神話伝説のフィールドを掘り起こしていった」(松村, 317) 特徴を持ち、「イングランドの産業化社会を蝕む実利主義や物質主義の解毒剤としてケルト文学」(松村, 312) をとらえており、さらには「ひたすら柔らかな光や霧や妖精の不思議を探し求めていた」(松村, 312) とも言われている。日本にいたハーンもこの産業化社会を憂い、妖精の不思議を探し求めていた一人である。ハーンは、時代が進むに連れて機械化が進み、それにとまって幽霊・天使・悪魔、さらには神までいなくなってしまうと憂いていたからである。以上が、ここでアイルランド的と指すものであり、日本にいたハーンも例外ではない。ちなみに Manfred Beller and Joep Leerssen (eds.), *Imagology: The cultural construction and literary representation of national characters: A critical survey* (Amsterdam: Rodopi, 2007) の "Irish" にもこのイエイツを初めとする流れが書かれている。イメージ論的にもこのアイルランド的というものは合致していると考えられる。

- 2) C.T. Onions (ed.), *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Clarendon Press, 1966), s.v. *twilight*.
- 3) 寺澤芳雄編『英語語源辞典』(東京: 研究社, 1997年; 縮刷版 1999年), s.v. *twilight*. しかし語源辞典の原義を「間の光」とする説明に問題がないわけではない。ゲルマン語の対応を見ると、オランダ語 *tweelicht*, 低地ドイツ語 *twelecht*, ドイツ語 *Zwielicht* であるから、「二(重)光」である。中高ドイツ語に *zwischenlicht* というのがあるが、これは後代の派生である。英独で共に \**twi-licht* > \**tween-licht* という混同が生じたものと思われる。意味にも揺れがある。(1) ca 1420 Lydgate 日没後の薄暮。(2) 1440 Promp. Parv. 日の出前・日没後の薄明かり。(3) 1593-99 Shak. Son 73.7 薄明期。注4に引く『神学大全』の用例では(2)と同じであるから、リドゲイトはラテン語から英語に流入してきた意味を限定して用いたものと思われる。シェイクスピアの段階では、朝夕の区別

の意識はなくなっている。

- 4) 鈴木弘『図説イエイツ詩辞典』(東京: 本の友社, 1994) 222、筆者はこの辞典の評価をまだすることができないが、イエイツ研究者が、多くある理解のうちの一つとして使う辞典なので、ここでも引用することにした。
- 5) R.A. Scott-James, *Fifty Years of English Literature 1900-1950* (London: Longmans, 1951), 89.
- 6) 第58問は天使の認識についてが主題となっているが、問題は7項目に分けられている。そのうちの第6と第7が朝と夕の薄明の認識に関わるものとなっている。項目名を引くと次の通りである。*Sexto: utrum cognitio angeli possit dici matutina et vespertina. Septimo: utrum sit eadem cognitio matutina et vespertina, vel diversae.* (Sancti Thomae Aquinatis *Summa Theologiae* I [= Bibliotheca de Autores Cristianos] [Matriti: La Editorial Catolica, 1951; tertia ed. 1961], 401). 『神学大全』4冊(東京: 創文社, 1973), 257には、「第六 天使の認識は「朝の認識」と「夕の認識」とに区別して語られることができるか第七 「朝の認識」と「夕の認識」とは同じ認識であるか、それともそれぞれ別個の認識であるか」(高田三郎・日下昭夫訳)と訳されている。これはトマス哲学の術語であって、このふたつの認識により、神の言葉の内外の世界のことがらを天使が知ることができるものとされる。Cf. Roy J. Deferrari, *A Latin-English Dictionary of St. Thomas Aquinas based on The Summa Theologica and selected passages of his other works* (Boston: St. Paul Editions, 1960), 165b. この術語が、ある特殊な場での認識ということで、ラテン語形のまま英語に流入したのである。ハーンは *Vespertina Cognitio* の句を使用しているが、これで *vespertina cognitio* と *matutina cognitio* の両者を合わせ代表していると思われる。
- 7) ハーンは前世から継承される人間の感情にとりわけ関心を寄せていた。「業の力によって」(By Force of Karma) (『こころ』所収)では、恐怖ではなく恋心について語られるが、初恋の恋情は前世でかなえられなかった先祖の思いが継承されて現れるものであるというのが仏教の教えであるとする。これは記憶の継承を否定する西洋の心理学と対立するものとハーンは理解している。
- 8) 小泉八雲「薄明の認識」『全訳小泉八雲作品集』8(東

- 京：恒文社、1988）468
- 9) Lafcadio Hearn, "Vespertina Cognitio," *Exotics and Retrospectives* (Boston: Little, Brown, 1898) . 本文は *The Writings of LH*, vol. 9 (Boston: Houghton Mifflin, 1922) , 195 に拠る。
- 10) *op.cit.*, 196
- 11) 小泉八雲「薄明の認識」『全訳小泉八雲作品集』8 (東京：恒文社、1988) 469
- 12) 金縛りは、いきなり起こるわけではなく、必ず前兆がある。およそ1～3キロヘルツ (kHz) の "ジーン、ジーン" または "ザワザワー" とした、強い圧迫感を伴う独特の不快感な前駆症状の数秒後～数分後に一瞬にして全身の随意運動が不可能となる。(日本語版ウィキペディア「金縛り」<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:金縛り>、2010年10月13日アクセス)
- 13) Lafcadio Hearn, "Vespertina Cognitio," *Exotics and Retrospectives* (Boston: Little, Brown, 1898) . 本文は *The Writings of LH*, vol. 9 (Boston: Houghton Mifflin, 1922), 203
- 14) *op.cit.*, 203
- 15) 「破られた約束」は『日本雑記』所収。病で死ぬ間際の妻は夫に再婚をしないと約束させ、棺に鈴を入れてもらう。夫は周囲の事情もあって、やむなく再婚をする。破約をされた先妻は亡霊となって、新妻を苦しめ、挙げ句の果てには首をちぎり殺してしまう。このとき、鈴の音がすると身体が動かなくなり、亡霊のなすがままになってしまう。
- 16) 「ラフカディオ・ハーンの世界の原話の考証と特徴——特に「破られた約束」"OF A BROKEN PROMISE" について——」『研究紀要』(島根県立出雲高等学校) 26 (1985.3) , 43.
- 17) 前掲論文、44 頁
- 18) 松村賢一「巨人、この異様なもの」『ケルト口承文化の水脈』(=中央大学人文科学研究所研究叢書 38) (東京：中央大学出版部、2006) , 24-25.
- 19) A Celebrated French Author. A Friend of Giglampz (i.e. L. Hearn) , "Salutatory," *Ye Giglampz*, vol.1 no.1 (June 21, 1874) , 2.
- 20) 松村有美「ハーンと手～週刊新聞記事『ザ・ギグランプス』の創刊の辞及びテニスに関する記事からの考察」『へるん』41 (2004) , 39. また、ハーンの怪談話でも、手にまつわるものに焦点をあてた論文もある。平川祐弘「手にまつわる怪談：ハーン、ルフアニュ、モーパッサン」『大手前大学人文科学部論集』6 (2005) 163-183.
- 21) 「日本近代文学館に所蔵されている芥川の旧蔵書には『The Celtic Twilight』の加筆訂正後の重版 (A.H. Bullen 1922 年) がある。この作品の本文は諸本によって大きな異同があり、芥川の翻訳はこの本であると認められる」(『芥川龍之介全集』1 [東京：岩波書店、1995], 296) と説明がしてある。尚、この全集に収められている翻訳は 'The Eaters of Precious Stones' 'The Three O'Byrnes and the Evil Fairies' 'Regina, Regina, Pigmeorum, Veni' の三つの章である。
- 22) "Chapter XIII : Some Fairy Literature", *On Poetry* (Tokyo: Hokuseido, 1941) , 254.
- 23) *op.cit.*, 255
- 24) ハーン的最晩年の作品集である『怪談』所収の「むじな」は『百物語』第三十三席を材源としていることは既に知られている。多分に滑稽味を含むこの小話に対して、純粹恐怖の作品であるという解釈がある。むじなの化けた恐ろしいのっぺらぼうとの出会いは闇夜の提灯明かりの中で行われる。最後にはそのほのかな明かりも消えて真っ暗闇になるのだが、深奥の闇との対比により、うすら明かりでの恐怖として、今議論しているものにつながるかもしれない。しかし「むじな」が純粹恐怖の作品であることが決定しているわけではない。三升家小勝の「のっぺらぼう」は明らかに類話であるし、この落語が純粹恐怖であるとは考えられない。晩年のハーンの世界には第5節まとめの段に記したように、多くの場合ふたつの面を兼ね備えているようである。「むじな」も薄明の認識と考え合わせて再考が望まれる。次の論文も「むじな」の二面性を考えているが、薄明かりへの言及はない。中田賢次「怪談の恐怖と滑稽——「むじな」をめぐる——」『へるん』24 (1987) , 67-69. なお「むじな」と直接関係するわけではないが、近年『捜神記』(二十巻本)の巻十六に同じ構造の怪談があることが指摘されている。Cf. 松村恒「ヘルン～中国怪奇～綺堂」『へるん』47 (2010) , 46. 中国怪談の場合も暗がりでの認識ということがあり、恐怖性を助長するものであることは類似である。それが純粹恐怖であるか否かは、更に論議を尽くさねばならない。
- 25) *op.cit.*, 256.
- 26) ハーンの子育て幽霊とその関連する民話について

は、小泉凡「母子愛の描出——大雄寺の伝承をめぐって——」『へるん』22 (1985), 17-19; 榊井幹生「京の子育幽霊」『へるん』22 (1985), 20-21; 23 (1986), 14-15 を参照。

#### Appendix: 伊藤亮輔氏の業績一覧 [完全ではない]

島根県立出雲高校で教鞭を執っておられた伊藤亮輔氏のハーン研究における業績は主として同高校の紀要等に掲載されていたということもあり、今日のハーン研究者にはあまり知られていないが、同氏には長い研究の実績がある。日本英文学会中国四国支部の最後の部屋は俗にハーン部会と呼ばれ、すべての研究発表がハーンを主題としたもので埋まる。同氏は長年この部会で弛まず発表をなされ、発表回数最多の記録はいまだ破られていない。回数のみならず内容の点からも、ハーンをアイルランドの伝承文学と関連づけて論じたのは恐らくは伊藤氏を嚆矢とするが、最初の発表の頃はわが国にまだケルトの知識が行き渡っていなかったこともあり、すぐに周囲の賛同を得られたわけではなかった。近年のケルトブームのお蔭もあって今日ハーンのアイリッシュネスを探る行き方は当たり前になってきて、当時伊藤氏の研究に対し口を極めて反対していた人が、かつての事実を伏せたままアイルランドとハーンを並立させて発言しているのを見るにつけ、今後のこの方面の研究の出発点ともなるべき先達の業績を埋もれさせてはならないと思い、手持ちのリストをここに転記しておきたい。

#### ◎紀要掲載のもの

[丹羽尚子編『大妻女子大学図書館所蔵小泉八雲関係図書目録(暫定)』(=プリンス通信・Beiheft 53) (Tama: Omega Verlag, 2003) より抜き出したものに、未見のものを『小泉八雲コレクション国際総合目録補巻』より補足。角括弧内の番号は後者のものである。番号のないものは目録補巻に欠落していることを意味する]

「Lafcadio Hearn の思想と作品についての一考察」『研究紀要』(島根県立出雲高等学校) 20 (1980), 49-59 [B1710]. 「ラフカディオ・ハーンの作品の出典についての考証——特に「安芸之介の夢」について」『研究紀要』(島根県立出雲高等学校) 23 (1983), 35-49. 「ラフカディオ・ハーンの作品とアイルランド民話の類似点について——「耳なし芳一のはなし」と「マジック・フィドル」等との対比——」『研究紀要』(島根県高等学校教育研究連合会) 23 (1987), 1-8. 「ラフカディオ・ハーンの「怪談」「骨董」及びその他の作品とアイルランドに残る民話・伝説

の類似点の解明——「日本警見記」の「小豆とぎ橋」とアイルランド民話の比較——」『研究紀要』(島根県立出雲高等学校) 26 (1988), 37-51. 「ラフカディオ・ハーンの「怪談」Kwaidan の一篇「食人鬼」JIKININKI の原話「いろいろのはなし」との比較と「食人鬼」Jikininki に見られるアイルランド等の要素について」『研究紀要』(島根県立出雲高等学校) 26 (1988), 52-71. 「ラフカディオ・ハーンの作品の原話の考証と特徴——特に「破られた約束」"OF A BROKEN PROMISE" について——」『研究紀要』(島根県高等学校教育研究連合会) 25 (1989), 40-52. 「ラフカディオ・ハーンの作品にみられる聖書の影響」『研究紀要』(島根県高等学校教育研究連合会) 26 (1990), 45-56 [B1707]. 「ラフカディオ・ハーンの来日後の再話作品にみられるヨーロッパ的要素について——特にフローベル・ゲーテの作品及びフランスの民話について——」『研究紀要』(島根県高等学校教育研究連合会) 27 (1991), 35-44 [B1711].

[以下のものは概して上の諸論文の要約的なものになっているので、フルタイトルの代わりにキーワードのみを記す]

#### ◎『へるん』誌掲載のもの

「アショー校」21 (1984), 42-43. 「小豆とぎ橋」22 (1985), 16-17. 「耳なし芳一」23 (1986), 12-13. 「食人鬼」24 (1987), 70-72. 「破られた約束」25 (1988), 81-83. 「十六桜」31 (1994), 115-117. 「死んだクレオル人の夢・和解」32 (1995), 11-14.

#### ◎日本英文学会中国四国支部大会(ハーン部会)での口頭発表

[年代の関係から会場で聴いたものはひとつもない。ハーン部会全体の発表リストは『へるん』34 (1997), 101-107. 同誌目次には榊井幹生氏作成となっているが、実際は風呂鞆氏の作成で、榊井氏は掲載にあたり仲介の労を取ったので、ミスプリが生じたのである。同号以降の発表については風呂氏により毎年が掲載され補遺となっている。以下のリストの数字は回数と年代である。]

33 (1980) アイルランド的要素 35 (1982)  
安芸之介 37 (1984) 怪談・骨董 38 (1985)  
アイルランド民話 39 (1986) 食人鬼 40 (1987)  
破約 41 (1988) 聖書 42 (1989)  
葬られた秘密 44 (1991) 和解 45 (1992)  
十六桜 46 (1993) 雪女 47 (1994) 文体  
48 (1995) 雅歌